

「Aspiration Biopsy—Cytologic Interpretation and Histologic Bases」

by L. G. Koss, S. Woyke, W. Olszewski

岐阜大学教授

高 橋 正 宜

Martin & Ellis によって細針穿刺法による腫瘍細胞診の1,400例に及ぶ系統的な検討が報告されたのは1930年で、米国にその端緒を発している。しかし、臨床的実用化を推進したのは Lopes-Cardozo, Franzén, Zajicek らのヨーロッパ学派で、主として血液学的手法によるものであった。したがって穿刺細胞診はゲームザ法による形態学が主流を占め、Papanicolaou 法を見慣れた者には判定の難しさが障壁となっていたが、本書は殆どが Papanicolaou 法を用いており理解しやすい。

本書は3人の共著であるが、Koss 教授はポーランド生まれで、Woyke, Olszewski 教授らは Montefiore 医療センターに学んだ Koss 教授の一門であるから500頁に及ぶ大作も一貫性がある。単著としての読みやすさがある。

第一部は総論で、近年針穿刺細胞

診を飛躍させた CT, 超音波などの画像診断による臓器到達の技術面に大きく頁を割いている。特筆すべきことは検体検索法で、走査電顕やフローサイトメトリーを用いる新しい DNA 定量法, 高性能画像解析法, 免疫細胞化学など近代的手法の導入と測定結果の解釈の仕方を加えていることである。第12回世界臨床病理学会議(小酒井望会長)に特別講演者として来日されたときの格調高い講演の思想が随所に溢れている。

第Ⅱ部, 第Ⅲ部は細胞診の実際に終始した各論で、第Ⅱ部には従来行われてきた触診可能な腫瘍で、乳腺, リンパ節, 甲状腺, 唾液腺, 前立腺, 軟部組織, 皮膚などを網羅している。悪性リンパ腫は分類も幅濫し、まともな難い部分であるが、細胞診の立場から解釈のしやすい簡潔な特徴把握が注目される。前立腺は本邦では比較的症例の少ない臓器で

あるが、内容も豊富で、癌の悪性度の区分, ホルモン療法に基づく修飾像なども詳述されている。いずれの臓器においても、診断の根拠, 鑑別点を病理組織学的基盤に立って記載しているところは世界的名著として知られる Koss 教授の Diagnostic Cytology の基本線に沿ったものであろう。

第Ⅲ部は触診しえない深部臓器で、画像診断を駆使して的確に病巣に到達, 診断している。すなわち肺, 縦隔, 肝, 脾, 腎, 骨, 卵巣, 中枢神経, 眼球などを含み、まさに全身到達しえない臓器はなく、腫瘍診断学の大きな柱としての位置づけを確立したものとして驚かざるを得ない。

図版の大部分は白黒写真であるが、多くの症例は弱拡大と強拡大を併用し、細胞像の解釈に十分な配慮がなされているので教育的テキストとして使用できる。病理医はもちろんであるが、臨床医に是非活用していただきたい良書で、本邦における穿刺細胞診の一般化に役立ってほしいものと願っている。

B5判変型 528頁 図22 写真1011

原色図25 1985 ¥17,000 ¥400

医学書院 刊